様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２４６６

研究課題名（和文）保育者の能力とは何か―実践能力獲得過程の多面的研究

研究課題名（英文）Expertise among preschool teachers: a multifaceted study of the acquisition of practical abilities

研究代表者
長屋　佐和子（Nagaya, Sawako）

常葉大学・教育学部・教授

研究者番号：３０４１０６３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　保育者の実践能力は，保育実践によって体験的に獲得されているが，このような専門的な訓練と経験を経て熟達する過程を熟達化という。本研究では，保育者の熟達化の様相を明らかにすることを目的に調査を行った。
　保育者としての熟達化は，基本的な技術の獲得から始まり，次第に子どもの内的な活動への配慮へ進む。その際，保育者自身の共感性によって保育活動に対する満足感や自信が左右される可能性がある。また，保育者としての自信の確立は，バーンアウトと相互に関係があり，バーンアウトが離職意思に影響を与えることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　保育者の職務は年々複雑化し，新任者にも即戦力が求められ，結果的に離職率が高まる要因ともなっている。本研究によって，保育者の熟達化の過程だけでなく，保育者としての自信を獲得するための要因が明らかになった。また，保育者としての自信の獲得は，バーンアウトと相互に関係があり，離職意思に影響を与えることが示唆された。これらの結果は，養成大学や職場における教育・指導の方策に一石を投じるだけでなく，離職率の低下にも寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：Preschool teachers’ practical abilities are acquired experientially through the practice of childcare. The proficiency gained through specialized training and experience is called expertise. In this study, we present the results of a survey conducted to clarify aspects of expertise among preschool teachers. This expertise begins with the acquisition of basic skills and gradually progresses to consideration of the inner activities of children, and the preschool teacher’s own empathy may affect their satisfaction and confidence in childcare activities. The results also suggested that the development of self-confidence as a preschool teacher is correlated with burnout and may also influence the intention to leave the job.

研究分野：臨床心理学

キーワード：保育者　熟達化　保育者効力感　情動認知

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

保育士とは，保育士の名称を用いて，専門的知識及び技術をもって，児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とするものをいう（児童福祉法第 18　条の４）。厚生労働省（2008）によって告示された保育所保育指針には，保育士は子どもを育て，保護者を支援するという高い専門性を求められる職種と記述されている。保育者養成機関では，これらの専門性が獲得され,保育の質が保障されるよう,学生に対する教育･指導を行うこと必要がある。しかし，保育者養成大学で保育士資格を取得して保育者となっても，卒後６年目までに半数以上が離職しているとの報告がある（全国保育士養成協議会，2009)。松尾（2017）は，職場は新任者の実践能力不足や精神的未熟さに対してどのように育成すべきかわからず，新任者は職場の高すぎる期待に苦悩していることが，結果的に多数の離職者を生んでいると指摘している。すなわち，保育者としての実践能力や保育者効力感が獲得されれば，職場における自信ややりがいが生まれ，離職に至らないことが推測される。保育者の実践能力は，専ら保育所等における実習などの体験的学習によって獲得されている。しかし，体験的学習がどのような実践能力を育成するのか，現在まで詳細な分析は行われていない。

保育者には，上述のような認知機能や言語・行動機能の獲得に加えて，障害者支援・保護者支援など高度な専門性が求められる。このため，職務は複雑化し，新任者にも即戦力が求められ，結果的に離職率が高まる要因ともなっていると考えられる。実践能力獲得の過程について詳細に検討することによって,養成大学や職場における教育･指導の方策に一石を投じるだけでなく，離職率の低下にも寄与することが期待される。

２．研究の目的

本研究では，“保育者の能力とは何か”という問題に焦点をあて，子どもの情動や集団に対する認知機能，読み聞かせや声掛けなどの言語・行動機能の視点から，保育者の実践能力の獲得過程について解析を行う。それにより，実践能力や保育者効力感を確立するために必要とされる諸要因について考察を行うだけでなく，離職率低下に寄与する所見を得ることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 保育者養成系大学生を対象とした質問紙調査

保育者養成系大学の女子大学生に対して，学生の個人的要因（共感性・表情認知）が保育者効力感に与える影響は実習経験によって異なるのか，というテーマで質問紙調査を実施した。

協力者は，実習経験前の２年生 127 名（平均年齢 19.07 歳，SD=0.26)，実習経験６週間の３年生 103 名(平均年齢 20.41 歳，SD=0.42)であった。使用した質問紙は，多次元共感性尺度（MES：鈴木・木野，2008)，日本版 IFEEL Pictures（JIFP)，保育者効力感尺度(三木・桜井，1998)であった。JIFP は，30 枚の乳幼児の表情写真から構成された図版セットである。この図版セットから母親データの快・不快評定平均値を参考に６枚の図版(快：図版４・21,不快：図版 12・17，ニュートラル：図版９・29)を選定し，各写真の表情が示していると感じられる快・不快の程度及び覚醒度について５段階で評定を求めた。大学の講義開始前に学生に対して倫理的配慮について説明を行った上で，研究参加を承諾した学生に対して質問紙に回答するよう求めた。

表１．協力者の内訳

ケースNo.	性別	経験年数	担当クラス	園児数
1	女性	4年	年中	21
2	女性	20年	年長	19
3	男性	1年	年長	19
4	女性	6年	年少	18
5	女性	20年	年中	21

(2) 絵本読み聞かせ場面のビデオを用いた検討

保育者の実践的な能力の熟達化を検討するために，絵本読み聞かせ場面で重要となる要因について抽出し,経験年数による変化について検討を行った。

まず，さまざまな経験年数の保育者を対象に，実際の保育現場における絵本の読み聞かせ場面のビデオ撮影を行った。協力者は，私立幼稚園に在籍する保育者６名，幼稚園の園児であった。なお，ビデオ撮影時に緊張が高かった協力者１名を分析対象外とした。協力者の内訳を表１に示す。協力者には，通常延長保育時に使用している教室において，選定した絵本（「いろいろバス」を園児に読み聞かせをするよう依頼した。各ビデオは約５分程度で，保育者の目線・園児の目線・俯瞰の３種類を撮影した。

次に，これらのビデオ映像を視聴したベテラン保育者２名（女性，公立幼稚園 39 年勤務，公立保育園 39 年勤務）に協力を依頼し，自由に討議するよう依頼した。発言内容は研究者が筆記し，記録した発言内容を KH Coder（樋口，2014）を用いて分析した。調査は，申請者らの所属機関における倫理審査の承認を経て実施した（承認番号 2018-21)。

(3) Web 調査―絵本読み聞かせに対する自由記述分析

保育者の実践経験の蓄積による熟達化の様相を明らかにするために，対象人数を増やして Web 調査を実施した。Web 調査では，上述のビデオのうちケースNo.１・２を使用した。協力者は，経験年数の異なる保育者 150 名（５年以下を初心者，６年以上 15 年未満を中堅，15 年以上をベテランとする３群）であった。協力者は各動画を視聴した直後に，次の質問に 100～200 文字で回

答した。質問Ⅰ.①この保育者の教育的な意図,②このクラスの子どもたちと保育者の信頼関係,③この保育者の行動や感情,質問Ⅱ.保育者として絵本の読み聞かせにおいて大切なことは何か。得られた結果は，KH Coder（樋口，2014）を用いて分析した。調査は申請者らの所属機関における倫理審査の承認を経て実施した(承認番号　研草 21-13)。

(4) 表情認知実験

複数人の顔表情の認知についての実験では，あいまいな表情の乳幼児のスナップ写真を４枚同時に呈示した。それらの顔写真が表出する感情の平均を快―不快の９件法で回答するよう実験参加者に求め，その判断の正確性について検討した。実験１では，参加者 15 名(平均年齢 22 歳，女性７名・男性８名)を対象とした個別実験を行った。参加者には，事前に乳幼児写真が表出する感情(快―不快)を１枚ずつ評定してもらっており，その評定結果にもとづいて，快・不快と評定された写真の比率が 3:1 あるいは 1:3 になるように，またそれらの快―不快の評価値平均がばらつきを有するように４枚１組を構成した。このことで，複数人の乳幼児に対し，１枚ずつの評価結果にもとづいた正確な表情判断が出来るかどうかを検討した。実験２では，先行研究の快―不快の評価値を基準とした他は，同様の手続きを用いて，参加者 156 名(平均年齢 18 歳，女性 110 名・男性 44 名・その他２名)を対象とした集団実験を行った。実験は，申請者らの所属機関における倫理審査の承認を経て実施した（承認番号 2018-21)。

(5) Web 調査―保育者の離職要因

当初計画では，令和４年度は保育職の離職要因についてインタビュー調査を実施する予定であったが，感染症拡大のため，Web 調査に変更した。調査では，保育者の離職意思に保育者の経験や能力，バーンアウトが影響するかどうかの検討を目的として行った。調査票は，参加者の属性に関する質問，現在の離職意思に関する質問，続けて多次元共感性尺度（鈴木・木野，2008)，保育者効力感（三木・桜井，1998)，ソーシャルサポート（小牧・田中，1993)，バーンアウト（久保・田尾，1994）の順に構成された。対象者 234 名の内訳を表２に示す。

表2. 研究協力者の内訳

性別		年代		勤続年数		現在の勤務先		勤務形態	
女性	164	20代	49	1～5年	22	幼稚園	16	常勤	212
男性	70	30代	67	6～15年	99	保育園	146	非常勤	17
その他	0	40代	67	16年以上	111	認定こども園	35	その他	4
		50代以上	51	無回答	2	その他	36	無回答	1
						無回答	1		
								合計	234

４．研究成果

(1) 保育者養成系大学生を対象とした質問紙調査

学年別に共感性と表情認知特性との関係性を調べるために，MES 得点を独立変数，JIFP の図版別の快・不快／覚醒度評定値を従属変数として重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。分析の結果，２年生では，想像性(β=−.18，p<.05)が高いと JIFP の図版 12（不快図版）から不快さを強く読み取ることがわかった(R^2=.031，F(1, 125)=4.01，p<.05)。また，他者指向的反応(β=.22)が高いと，図版 21(快図版)に対する覚醒度が高くなることが示された(R^2=.048，F(1,125)=6.20，p<.05)。

３年生の MES 得点と JIFP の快図版の結果を図１に，ニュートラル図版の結果を図２に，不快図版の結果を図３に示す。図１より，３年生は他者指向的反応，視点取得，自己指向的反応の得点が高いほど，快図版に対して快・不快評定値が低くなることが示された。図２では，他者指向的反応が高いほど，ニュートラル図版に対して快・不快評定値が低くなることが示された。さらに図３では，視点取得が高いほど，不快図版に対する快・不快評定値が低くなり，他者指向的反応が高いと覚醒度が高くなることが明らかとなった。これらに対して，被影響性が高い場合，不快図版の示す情緒の覚醒度は低く読み取られることがわかった。

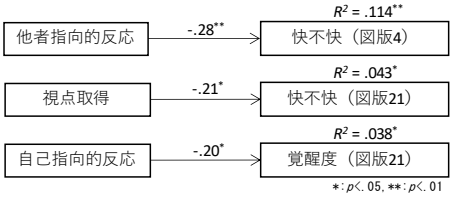

図１．多次元共感性がJIFPの快図版の読み取りに及ぼす影響（３年生）

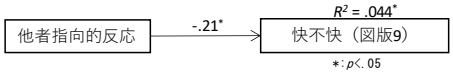

図２．多次元共感性がJIFPのニュートラル図版の読み取りに及ぼす影響（３年生）

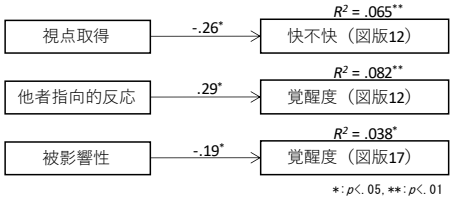

図３．多次元共感性がJIFPの不快図版の読み取りに及ぼす影響（３年生）

また，２年生では，視点取得・他者指向的反応が高いほど保育者効力感が高まるが，被影響性と自己指向的反応が高いと保育者効力感を低下させた(R^2=.306，F(4,122)=13.44，p <.001)。３年生では，被影響性が高いと保育者効力感は低下し，他者指向的傾向が高いと保育者効力感が高くなることが示された(R^2=.117，F(2,100)=6.66，p<.01)。

これらの結果から，２年生では共感性と表情認知特性との関係性はほとんど見られず，乳幼児の快感情を重視する傾向があるが，３年生では，乳幼児の不快感情を敏感に読み取ることが可能となり，様々な保育状況に素早く対応できるようになることが示唆される。また，実習経験は保育者効力感に直接的な影響を与えないが，共感性が高い学生は，実習を経験することによって乳幼児の不快感情に敏感になることが示された。このことは，保育者の情動認知といった個人的特性が，職業への適応に影響を与える可能性を示唆している。

(2) 絵本読み聞かせ場面のビデオを用いた検討

さまざまな経験年数の保育者を対象に，絵本の読み聞かせ場面のビデオ撮影を行った。このビ

デオ映像をベテラン保育者 2 名に提示し，絵本読み聞かせ場面について自由に討議するよう依頼した。その発言内容について計量テキスト分析（クラスター分析）を行った。

その結果，６クラスターが抽出された。読み聞かせを行った保育者の経験年数によって，絵本読み聞かせ要因の各クラスターに関係する単語の出現頻度に差があるか，$\chi 2$乗検定を用いて比較した。それらの結果を表３に示す。その結果，「子どもとの信頼関係」に関する発言は経験年数 20 年で有意に少なく，「子どもの問題行動」は有意に多いことが示された。また，「自然な読み聞かせ」は経験年数１年で有意に多いことが明らかとなった。

これらの結果から，経験年数１年では子ども集団に対する自然な読み聞かせが主となるが，経験年数４～６年ではより教育的な視点と関係があり，経験年数 20 年では特定の子どもに対する配慮が関係することが示された。保育者の経験年数によって読み聞かせの特徴が変化し，より複雑化・個別化していくことが明らかになった。

表3. 保育者の経験年数による絵本読み聞かせ要因の各クラスター出現頻度の比較

経験年数	教育的な意図	保育者の行動・感情	子どもとの信頼関係	子どもの問題行動	絵本を読むときに大切なこと	自然な読み聞かせ
１年	0 (0.00%)	3 (20.00%)	5 (33.33%)	1 (6.67%)	10 (66.67%)	7 (46.67%)
４～６年	6 (26.09%)	4 (17.39%)	8 (34.78%)	0 (0.00%)	19 (82.61%)	3 (13.04%)
20年	6 (37.50%)	2 (12.50%)	0 (0.00%)	5 (31.25%)	11 (68.75%)	4 (25.00%)
x^2値	6.645*	0.329	7.220*	9.745**	1.537	5.355

*；p<.05，**；p<.01

(3) Web 調査―絵本読み聞かせに対する自由記述分析

保育者の実践経験の蓄積による熟達化の様相を明らかにするために，前述の研究によって得られた結果をもとに，対象人数を増やして Web 調査を実施した。協力者を，経験年数５年以下を初心者，６年以上 15 年未満を中堅，15 年以上をベテランとする３群とした。参加者自身が絵本読み聞かせにおいて大切だと考えていること（自由記述）について，KH_coder（樋口，2020）を用いて３群を比較する共起ネットワーク分析を行った（図４）。

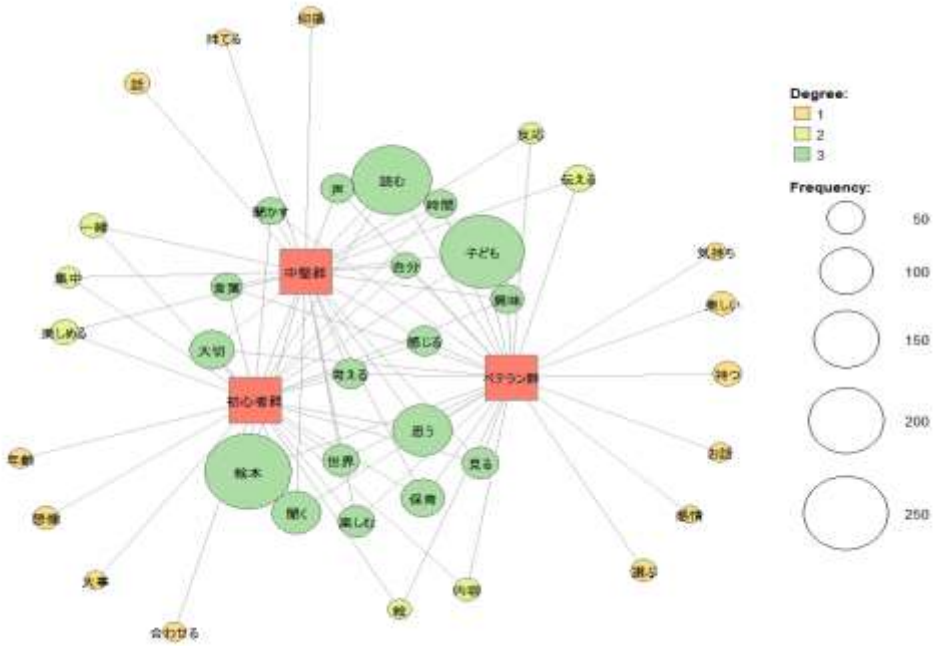

図４　自由記述Ⅱ：経験年数３群の共起ネットワーク分析

初心者群では，子どもの年齢や興味に合わせた絵本を選択することや，子どもの想像力を高めることが重視された。また，絵本読み聞かせの基本的なポイントとは何かを考えていることからも，絵本読み聞かせの基本的なポイントを模索していることが推測された。中堅群では，話を聞くための子どもの体勢づくりや，子どもが興味を持てるような絵本の選択・読み聞かせ方，子どもが楽しめるように抑揚を工夫していることから，絵本をよりよく読み聞かせるための技術の確立に留意していると考えられる。これらに対してベテラン群では，子どもの気持ちを重視し，子どもがお話の世界に入れるように留意することが明らかになった。また，子どもの年齢や興味にあった絵本を選ぶことによって，子どもが絵本の世界を楽しめるように配慮していた。

これらの結果から，経験年数１～５年では，絵本読み聞かせの基本的な技術を模索し，６～15 年の間に技術の獲得が進み，15 年以上になると，子どもの情緒的な発達を考慮しながら，十分にお話の世界を楽しめるように配慮することが示された。

(4) 表情認知実験

複数人の顔表情の認知についての実験では，あいまいな表情の乳幼児写真を４枚同時に呈示し，それらの顔写真が表出する感情の平均を快―不快の９件法で回答するよう実験参加者に求めた。実験１(個別実験)では，４枚の顔写真が表出する感情の平均について参加者が回答した値と１枚ずつの評定にもとづいて求められる平均値の間には，強い相関が認められた(図５)。

実験２(集団実験)でも同様に，参加者が回答した値と１組ごとに計算された平均値の間には強い相関が認められた。２つの実験を通して，われわれは４人の乳幼児が表出する感情を平均値によって回答できることを確認した。

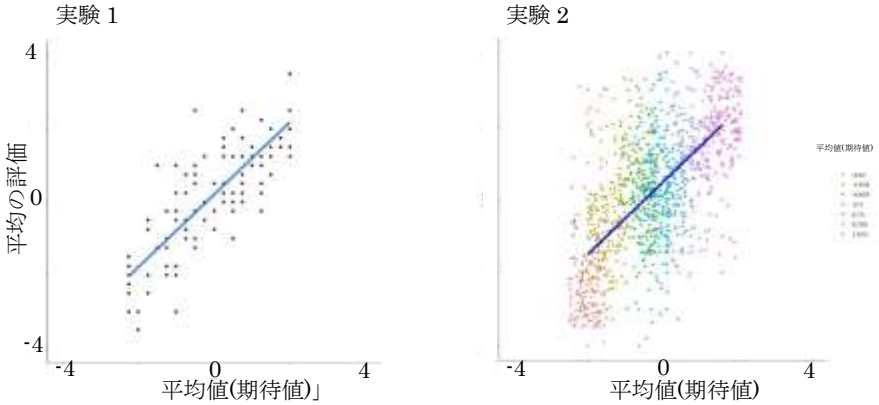

図 5. 参加者による平均の評価と１枚ずつの評価により求められた平均値(期待値)の関係 (実験２の図は，点の重なりを避けるため，±0.5 の範囲でランダムな散らばりを加えて示す。)

(5) Web 調査―保育者の離職要因

234 名の保育士から得られた結果を分析した。まず，各尺度間の相関関係を概観したところ，保育者効力感，ソーシャルサポート，バーンアウトは相互に関連していることがわかった（$rs \geqq .220$)。なかでも，保育者効力感はバーンアウト：個人的達成感と強い相関を示し（$r=.457$)，バーンアウト：情緒的消耗感は，離職意思に強い相関が認められた($r=.723$)．一方で，多次元共感性と各尺度の関連の有無は，共感性の下位尺度によって異なっており，一貫していなかった($rs \leqq .344$)。バーンアウトは，職務パフォーマンスの低下や健康問題，離職を予測することができると考えられている。そのため，ここではバーンアウトの下位尺度が離職意思の高低に影響すると仮説を立て，共分散構造分析によって，その妥当性を検証した。その結果，バーンアウトが離職意思に影響することを仮定したモデルの適合度が高いことがわかった。

(6) 総合考察

本研究では，“保育者の能力とは何か”という問題に焦点をあて，保育者の実践能力の獲得過程について多面的な分析を行った。本研究の成果により，保育者養成においては，学生自身の共感性が高い場合は，実習経験を積むことによって，子どもの不快感情を受け止めることが可能となることが示唆された。子どもの不快感情を受け止めることによって，的確な保育行動が可能となり，結果的に保育者としての自信を高めると考えられる。

保育者として就職した後，経験年数１～５年では，保育者としての基本的な技術の獲得を模索する。特に，子どもの発達に合わせることや，子どもの内的な活動に注意を払おうとする傾向が示唆される。６～15 年の保育経験を積むと，さらに技術の獲得が進み，子どもとの交流に必要な技能が習得される。保育経験が 15 年以上になると，子どもの情緒的な発達を考慮しながら，子どもが十分に楽しめるように配慮することが可能となる。保育者としての熟達化は，基本的な技術の獲得から始まり，次第に子どもの内的な活動への配慮へ進むと考えられる。その際，保育者自身の共感性によって保育活動に対する満足感や自信が左右される可能性が示唆される。

本研究の結果から，保育者が感じる情緒的消耗感は，離職と強い関係があることが示された。保育者としての実践力の獲得にはおおよそ６年以上の保育経験が必要であることが推測されるが，その間に情緒的消耗感が生じることによって，離職意思が高まることが推測される。以上の結果から，保育者の早期離職を回避するためには，保育活動の初期段階において，子どもの不快感情に対する保育者の読み取りを支援し，達成感や効力感の確立を図ることが有効である。

引用文献

樋口 耕一 (2017) 計量テキスト分析および KH Coder の利用状況と展望　社会学評論，68(3)，334-350.

厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説書.

久保 真人・田尾 雅夫 (1994)．看護婦におけるバーンアウト―ストレスとバーンアウトの関係―　実験社会心理学研究，34，33-43.

松尾 由美　(2017)　保育士の早期離職を防ぐためのキャリア教育 ―キャリアプランニング能力の育成を目的とする問題解決シミュレーションゲームの提案―．江戸川大学の情報教育と環境，14，19-22.

三木 知子・桜井 茂男 (1998)．保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響　教育心理学研究，46(2)，203-211.

鈴木 有美・木野 和代 (2008)．多次元共感性尺度 (MES) の作成―自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて―　教育心理学研究，56，487-497.

全国保育士養成協議会 (2009)．指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査　保育士養成資料集，50.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 長屋佐和子・小河妙子	４．巻 28(2)
２．論文標題 保育者養成課程学生の共感性・表情認知特性が保育者効力感に及ぼす影響 ： 大学2年生と3年生の比較	５．発行年 2019年
３．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	６．最初と最後の頁 123-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長屋佐和子・小河妙子・鑓水秀和	４．巻 40
２．論文標題 保育者の絵本読み聞かせに関連する要因の抽出	５．発行年 2020年
３．雑誌名 常葉大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 179-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 長屋佐和子・小河妙子・鑓水秀和
２．発表標題 絵本読み聞かせ動画に対する保育者の自由記述分析―テキストマイニングを用いた経験年数による比較―
３．学会等名 日本心理学会第86回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Sawako Nagaya,Taeko Ogawa, Hidekazu Yarimizu
２．発表標題 Factors related to the practical abilities of the nursery teachers in the picture book reading
３．学会等名 The 32nd International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hidekazu Yarimizu, Taeko Ogawa, Sawako Nagaya
２．発表標題 Subjective evaluation of an average of emotion from multiple infants’ expressions
３．学会等名 The 32nd International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鑓水秀和・小河妙子・長屋佐和子
２．発表標題 複数人の乳幼児に対する表情判断の個人差の検討
３．学会等名 日本基礎心理学会第38回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小河　妙子 (Ogawa Taeko) (30434517)	弘前大学・保健学研究科・教授 (11101)	
研究分担者	鑓水　秀和 (Yrimizu Hidekazu) (60808674)	人間環境大学・心理学部・講師 (33936)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関